

ひかりのこ

12月園便り

聖ミカエル幼稚園
2014年11月21日

『おむすび』

毎週日曜日の朝5時台のNHKの番組に『あの人に会いたい』という、亡くなった有名人の追悼番組があります。私は目が覚めているときは、『小さな旅』に続くこの番組をよく見えています。11月の半ばの日曜日は料理研究家の小林カツ代さんでした。朗らかで元気いっぱいなお人柄が私は大好きでした。

そのカツ代さんが、大切にしていた料理が「おむすび」。「全国おむすび隊」を結成し、各地に出向き料理教室を行いました。ある時カツ代さんは、罪を犯した少女たちの更生施設で講習会を行いました。普通なら「あなたのお母さんのおむすびの味、覚えているでしょう。」と言うところですが、あえてお母さんという言葉は出さず、「いつか好きな人ができたらこのおむすびを作って食べさせてあげてね。そして、将来生まれてくる子どもに美味しいおむすびを作ってあげてね。あなたもいつかきっと優しいお母さんになれるよ。」とお話した、ということです。

またカツ代さんは「最近のごはんは塩を混ぜて、どこを食べても同じ味、というおむすびがあるけど、手に塩をつけて握ったおむすびは、まずしょっぱくて、次にふわっとあったかいご飯の味がして、それからおいしい具に行き当たる、その変化がおいしいのよ。」とお話していました。

そうそう、私が作るおむすびも手に多めの塩をつけて握ります。水はつけません。塩を多くすると、水をつけなくても手にご飯がつかないのです。学生時代、ゼミの仲間と山登りをしたとき、大雪の湧駒岳の山荘のおばちゃんたちに教えてもらった作り方です。水が少ないので、腐りづらいのだそうです。

私の3人目の子どもは痩せているのによく食べる子で、高校時代、お弁当のほかにおむすびを毎日8個持って学校に行っていました。朝の忙しい時間にお弁当の他に8個のおむすび作りはなかなか大変でした。でも、それをほぼ毎日作って持たせていました。高校生の男の子に、母親としてできることは、もうそのぐらいしかありません。息子は寮生のお友達にも分けてあげて、みんなで「おいしい、おいしい。」と、食べていたそうです。

お母さん方も週2回のお弁当作り、ご苦労様です。下のお子さんがいる方は尚大変でしょう。でも、お母さんが心を込めて作るお弁当や毎日のご飯は、お子さんの体を成長させるだけではなく、心も育てていくのです。お料理が上手でなくても、見た目があまりきれいでも、お母さんの作ったごはんは何よりおいしいものです。

いつかお子さんが大きくなって家を離れていったときにも、「おふくろの味」を懐かしんで時々家に帰ってきてくれる、そんなご家庭づくりをしていただけたら、と願います。

園長 渡部良子

月主題：クリスマスの喜び

- ・クリスマスの出来事を知り、喜び、祝う
- ・まわりの人々、社会・世界の出来事にも目を向け、恵みをわかちあう

キリスト教保育

「待つということ」

クリスマスが近づきました。幼稚園は降誕劇（ページェント）の練習だけなわけです。保護者の皆さまもクリスマスを楽しみにしておられることと思います。今年は11月30日からクリスマスまでの期間を私たちの聖公会では「降臨節」、カトリック教会では「待降節」と呼んで大切に過ごします。

さて、聖書に記されているクリスマス物語りには多くの人々が登場しますが、年齢も立場も違っていながら、何かを待つという点で共通の人々が描かれています。しかも長い間、人生のほとんどの時間を、深い忍耐と希望をもって尊いものの訪れを待っているのです。

私たちも日常生活で待つことがあります。多くの場合、あまり生産的なこととは思えません。バスや地下鉄の到着を待つ時間も、短い方が良いに決まっています。待ち合わせをして待たされると、ずいぶん損をしたような気がします。待つということは多くの場合、時間の浪費としか思えないものです。

しかし、待つという態度は本当は随分深いもので、人間にとって必要なだと聖書は教えています。たとえば子育ての中にも「待つ」という要素があるのではないのでしょうか。親が子どもにできることは無限にありますが、親から提供されたものを通して、子どもが自分の力で成長して行く場面も多いように思います。自分が知っている以上に大人になった子どもの姿に驚く時があります。それは待っていたがゆえの驚きかもしれません。聖書が待つことにこだわるのは、自分の力への過信を戒め、人間の弱さと小ささに寄り添う命の創造主に委ねることによって感謝と喜びが与えられる、そのような生き方を示すためです。

この時、自分を省みながら静かにクリスマスを待ち、そして大きな喜びが与えられますようにお祈りいたします。

チャプレン 司祭 下澤 昌